

コロナ禍の統合実習における 実習形態の違いによる学生の学び（第2報）

Student learning progress by different training forms of integrated training during the COVID-19 pandemic (2nd report)

竹田理恵・遠藤美穂子・黒木雅美・高橋由美
TAKEDA Rie, ENDO Mihoko, KUROKI Masami, TAKAHASHI Yumi

キーワード：統合実習，代替実習，学び，看護学生

Key words : Integrated Nursing Practice, alternative training programs, learning described in the assignment report, nursing students

【要 旨】

本研究の目的は、統合実習における実習形態の違いによる学びを明らかにし、代替実習時の教育的意義および課題について示唆を得ることである。2020年度のコロナ禍で行われた統合実習最終レポートの計量テキスト分析を行った。結果、学内群も臨地群も同様に、統合実習のキーワードである継続看護・看護過程（複数受け持ち）・チーム医療・安全管理・看護倫理・看護観に関する学びが多く得られていた。最も多く出現した語は学内群・臨地群ともに「患者」、「学ぶ」、「行う」であり、学内群では【患者を中心とした看護実践の重要性】が、臨地群から【患者・看護師から学び考えた看護】が示された。学内群は自分自身を見つめ自分を主体とした学びを得、臨地群は患者や看護師など他者との関わりの場面から他者の存在を大きく感じながらより実践的に学んでいた。短期間でも臨地での関わりが学生の学びに影響を及ぼす事を前提に、今後も実習施設との連携を強化し代替実習の教育的アプローチ方法を吟味する必要性が示唆された。

【Abstract】

The purpose of this study is to clarify the learning of nursing students due to the difference in the lesson format in the integrated training. In addition, it is to get suggestions about the educational significance and issues at the time of alternative training. The assignment report of the integrated training conducted during the COVID-19 pandemic were analyzed by text mining. As a result, both the

on-campus group and the clinical group learned a great deal about continuous nursing, nursing process (in charge of multiple patients), team medical care, safety management, nursing ethics, and nursing view, which are the keywords of integrated training. “Patient,” “learn,” and “do” were the most frequently used words in both the on-campus group and the clinical group.

In addition, it was shown that the students in the on-campus group were learning [the importance of patient-centered nursing practice], and the students in the clinical group were learning [nursing that was learned and thoughts from patients and nurses]. The students in the campus group looked at themselves and learned by themselves. The students in the campus group reflected upon their actions and were able to learn from seeing each other practice. The clinical group learned practically by experiencing being around other nurses in a working environment. It was suggested that even a short period of involvement in clinical training would affect students’ learning. It is necessary to continue to strengthen cooperation with training facilities and consider educational approaches to alternative training.

I. 緒言

2009年の保健師助産師看護師課程の指定規則改訂にて、「看護の統合と実践」が新設され、統合実習はこれまでに学習した内容をより臨床実践に近い形で学習し、知識・技術を統合する内容として設けられた[1]。臨地実習は学内での知識・技術・態度の統合を図りつつ、看護方法を習得することをねらいとしており[2]、看護教育には必要不可欠である。しかし、2020年度は、COVID-19の感染拡大により、一部の臨地施設の学生受け入れ中止または制限されるという状況となった。A短期大学においても、領域実習は実習施設の受け入れ状況により、臨地実習と学内実習を抱き合わせる実習、全日学内実習、遠隔実習と対面実習を抱き合わせた実習、全日遠隔実習などのさまざまな実習形態をとることを余儀なくされた。統合実習においても、約半数の学生が一部臨地実習、約半数の学生が全日学内実習となり、同領域内で実習形態の違いが生じた。いかなる実習形態になった場合でも、臨地実習と同様の学修が可能となるよう、紙上事例の受け持ち患者の看護援助、シミュレータ・モデルの活用、オンライン上でのカンファレンスの実施などの配慮や工夫を行い、代替実習を行った。しかし、それでも実習形態により何らかの差が生じることは否定できない。

すでに第1報として、実習形態に伴う看護技術経験について、学内群は受け持ち日数の経過とともに「より個別性の高い技術の経験」ができていたこと、臨地群は自己の看護技術提供と合わせ、臨床で行われている看護場面への参加により、「幅広く技術経験および見学」ができていたことを明らかにした[3]。その看護技術経験の差から、看護技術内容の精選およびシミュレーション教育と技術演習の特徴を踏まえたベストミックスを探る必要性並びに模擬患者や模擬病棟の活用など実習環境を整える必要性など、代替実習をおこなう際の教育的示唆を得た。

統合実習の学びに関する先行研究によると、岡田ら[4]は、多重課題演習とシャドウイング実習に焦点化し、自律した看護師になる自覚やチームの一員としての自覚を高める学びを得、さらに患者中心の看護へとつながっていたとしている。近藤ら[5]は、複数患者受け持ち実習での学びについて、ケアの優先順位を考えた行動が学べ就職後の行動に役立つ実習と捉えていた一方で、主体的な行動ができなかったことを困難に感じていたとしている。岩坂ら[6]は、看護マネジメントに関する学びについて、学生はジョブシャドウイングを通して看護管理者、リーダー看護師の業務の実際から未知なるそれぞれの役割・機能の理解、受け持ち看護師の行動からはメンバーシップ

力とその発揮を学び取っていたと報告している。また、佐居ら〔7〕は、夜勤や遅番実習を体験する実習を通して主体的にメンバーシップをとるという目標は達成されやすいが、個々の患者の理解が浅くなりやすいと報告している。A短期大学の統合実習においても、実習目標として多重課題や複数受け持ちなどの内容を掲げており、先行研究と同様の学びを得ている可能性がある。しかし、実習形態の違いにより生じる学びの差に関する研究報告は現時点では見当たらない。

II. 研究目的

本研究の目的は、統合実習における実習形態の違いによる学びを明らかにし、代替実習時の教育的意義および課題について示唆を得ることとする。

III. 本研究における用語の操作的定義

代替実習：実習に代えて演習又は学内実習等を実施することにより、必要な知識及び技能を習得する実習〔8〕

シミュレーション教育：模擬的な状況の中で、学習者としての個人やチームが医療を経験し、その経験に基づいて、最善の医療を実践するにはどのような専門的な知識・技術・態度を備えていなければならないのかを、学習者同士のディスカッションを中心に、関連資料を活用したり、指導者からのフィードバックを参考にしながら医療者としての能力を向上させていく教育〔9〕

また、本稿では、以下の抽出された用語について、研究者間での統一を図るため定義し使用した。

チーム：病棟内において医療従事者間（他職種間）で協同し合う集団であること

メンバー：看護師間での協同し合う成員であること

リーダー：看護師間での協同の統率者であること

スタッフ：個々の看護師が看護業務の担当者であること

IV. 方法

1) 「統合演習・統合実習」の概要

(1) 統合演習・実習の位置づけ

統合実習はこれまでに履修した知識と技術を統合し、看護実践能力を高める集大成の実習として位置づけられており、全ての領域実習及び在宅看護論実習の単位を修得していることが履修要件となっている。

実習時期は例年11月下旬から12月中旬の3週間（3単位）、実習前後に統合演習60時間（2単位）を配当している。

(2) 実習目的・目標及びキーワード

〈実習目的〉

保健・医療・福祉チームにおける看護職能の役割を認識し、看護マネジメント能力を養い、3年間で学習した看護の知識・技術・態度を統合し、看護実践能力を身につける。

〈キーワード〉

継続看護・看護過程（複数受け持ち）・チーム医療・安全管理・看護倫理・看護観

〈実習目標〉

1. 保健・医療・福祉チームの中で連携・協働して行われている看護の役割と継続看護について理解できる。
2. 複数患者を受け持つことを通して、患者の状況に応じた優先順位の判断や時間管理を適切に行い、責任を持って受け持ち患者への看護過程を展開できる。
3. 看護チームのリーダーシップ・メンバーシップを理解しチームの一員として責任ある行動を学ぶ。
4. 看護部や実習病棟における看護管理の実際を学ぶ。
5. 災害時や医療事故の際の対応などを通し医療現場における危機管理について学ぶ。
6. 日常生活援助技術や診療の補助技術を安全

- 性・正確性・安楽性を考慮して実施できる。
7. 自己の看護技術の課題を明らかにし、技術の向上を図ることができる。
 8. これまでの学修を振り返り、自己の看護観を深めることができる。
 9. 看護倫理に則った看護，看護の探究，社会人としての態度など看護師としての自己評価を行い，生涯にわたり学び続けることの重要性を認識することができる。

(3) 学生配置及び実習形態

臨床側との調整を行い，統合実習は学内実習のみ（学内群：46名）と一部臨地実習（臨地群：42名）の2つの実習形態となった。統合実習グループは領域実習グループと同様とし，3年次の領域実習において臨地での実習を経験したグループを学内群，3年次に臨地での実習をしていないグループを臨地群に配置した。

(4) 統合実習代替実習の日程，内容・方法

実習の日程は表1，内容・方法は以下の通りである。

学内群は，2病院の協力を得てオンライン及び

授業動画による看護部オリエンテーションを実施した。ハイブリッド型シミュレーションによる複数患者受け持ち実習を5日間行った後，退院指導・継続看護，看護管理に関する演習・実習を行った。退院指導に関しては事例ごとに共有・統合し，臨地群へ発表伝達し意見交換を行った。

臨地群は，4日間（半日）実習の初日に看護部オリエンテーション，2日目より1事例を受け持つとともにリーダー及びメンバーのシャドウイングを行った。及び病院実習後，グループワーク（以下，GWとする）により「シャドウイングによる学び」をまとめて学内群と共有できるよう発表準備を行った。その後，学内にてハイブリッド型シミュレーションによる複数患者受け持ち実習を4日間行い，退院支援・継続看護に関する演習・実習を行った。

「学習成果発表会」では，統合実習で学んだキーワード“医療安全”，“看護倫理”，“看護過程（複数受け持ち）”，“継続看護”，“チーム医療”から，1つのテーマを決めて，学びを発表し共有した。

両群とも学内でハイブリッド型シミュレーションによる複数患者受け持ち実習を行ったが，学生にとって初めて経験する実習内容・方法であった。

表1 統合実習日程および内容

実習日		1日	2日	3日	4日	5日	6日	7日	8日
学内群	午前	オリエンテーション	病院オリ (遠隔)	複数患者受け持ち実習					退院支援
	午後	個別面談							継続看護
	場所	学内							
臨地群	午前	オリエンテーション	病院オリ・シャドウイング			記録整理	複数患者受け持ち実習		
	午後	個別面談	遠隔実習			GW①			
	場所	学内	病院			学内			

実習日		9日	10日	11日	12日	13日	14日	15日
学内群	午前	医療安全	災害対策	GW①発表	GW②発表	GW③	学習成果発表会	まとめ
	午後	感染対策	遠隔	遠隔	遠隔	遠隔	レポート作成	
	場所	学内						
臨地群	午前	複数患者受け持ち実習		GW①発表	GW②発表	GW③	学習成果発表会	まとめ
	午後			遠隔	遠隔	遠隔	レポート作成	
	場所	学内						

※ GW① 退院支援・継続看護に関する内容
 GW② シャドウイングに関する内容
 GW③ 実習のキーワードに関する内容

（5）学内実習における事例設定と設定理由

①事例の設定：成人期事例患者1名・老年期事例患者2名の計3名の患者を設定

- ・成人期：心臓カテーテル検査目的にて入院の患者（既往に急性心筋梗塞及び経皮冠動脈形成術後）。急性期にある患者として、学生全員が受け持つ。以下、成人期事例患者とする。
- ・老年期：老年期事例患者A及び老年期事例患者Bの2事例。

〈老年期事例患者A〉大腸がんにて人工肛門造設術後の再入院（人工肛門自己管理困難）患者。

〈老年期事例患者B〉変形性股関節症。人工関節置換術後の回復期にある患者。

学内群及び臨地群の各群内で老年期事例患者A／老年期事例患者Bの受け持ち学生が半数ずつになるよう調整し、複数患者受け持ち実習後の退院支援・継続看護の学習時に複数の患者の個別性を考慮した看護について共有する機会とした。以下、老年期事例患者とする。

②複数患者設定は、急性期にある患者（成人期事例患者）及び回復期・慢性期にありセルフケア不足のある患者（老年期事例患者）を各1例ずつ、計2名の患者を受け持ちとした。

③多重課題の対応場面

- ・成人期事例患者検査日の検査準備、病棟出棟、検査帰室後の観察援助と老年期事例患者の日常生活援助及びリハビリテーション室への送迎等を多重課題の対応場面として設定した。

④看護援助の優先順位の判断

- ・多重課題発生時及び発生が予測される時点で優先順位について考え、判断、行動する場面を設定した。

（6）電子カルテ作成過程

事例の作成及び電子カルテシステムは、福岡女学院看護大学が開発した「教育用電子カルテシステム」の既存事例の変更及びオリジナル事例を作成した。学生への事例の提示は、作成したカルテ

の内容をPDFファイルとし、実習室内設置のパソコンにデータを置いた。学生は臨地実習と同様に実習室内で電子カルテより情報収集を行った。今回使用した電子カルテシステムは領域担当内の2名の教員が使用許諾手続きを行っており、既存事例の活用・修正、さらにシステムを活用しての新たな事例作成が認められているものである。

（7）複数患者受け持ち実習におけるシミュレーション学習について

①受け持ち患者：老年期事例患者AまたはBを1事例目、2事例目として成人期事例患者を受け持ち、複数患者の看護過程の展開を行う。

②教員間の事例の状況、シミュレーション学習の場面の共有、指導の統一を図るために事例ごとに「複数患者受け持ちガイド」を作成し、配布・共有を行った。記載内容は、朝の申し送り内容、患者の1日の予定、学ばせたいこと等である。

（8）課題レポートの提出について

統合実習全体の学びとして、実習最終日に課題レポートを課し、「統合実習で学んだこと」をテーマにA4用紙1から2枚程度とした。他実習記録と共に提出とした。

2) データ収集期間

2020年11月～2021年1月

3) 対象者

2020年度にA短期大学看護学科に在籍し、統合実習を履修した学生88名

4) データ収集方法及び内容

統合実習終了後、学生には「統合実習で学んだこと」をテーマに最終レポートの課題を課した。学生が作成し提出した最終レポートについて、研究への同意が得られた39名（学内18名、臨地21名）（同意率44.3%）の提出物を使用した。

5) データ分析方法

統合実習最終レポート（学内18名，臨地21名）を文字化（データ化）し，学生の記述した段落ごとに，ひとつのデータとし，KH Coder 3（khcoder-3b04a.exe）を用いて計量テキスト分析を行った．この分析方法は質的データを数値化することで計量的に分析する方法であり，信頼性・客観性を向上させる利点がある [10, 11]．

データ分析の流れを，図1に示した．まず初め

に，データのクレンジングを行い，抽出語リストで，意味を持たない語や同様の意味をもつ語を調整した．さらに，つなげた方が結果を解釈しやすくなる語についてはその語を強制的に抽出するよう設定し，表記ゆれの統一を行った．さらに，共起関係の強弱をみるために Jaccard 係数を示した．Jaccard 係数は0から1までの値をとり，1に近づくほど関連が強いことを意味する．分析を進めるにあたり，それぞれの語がどのように使用

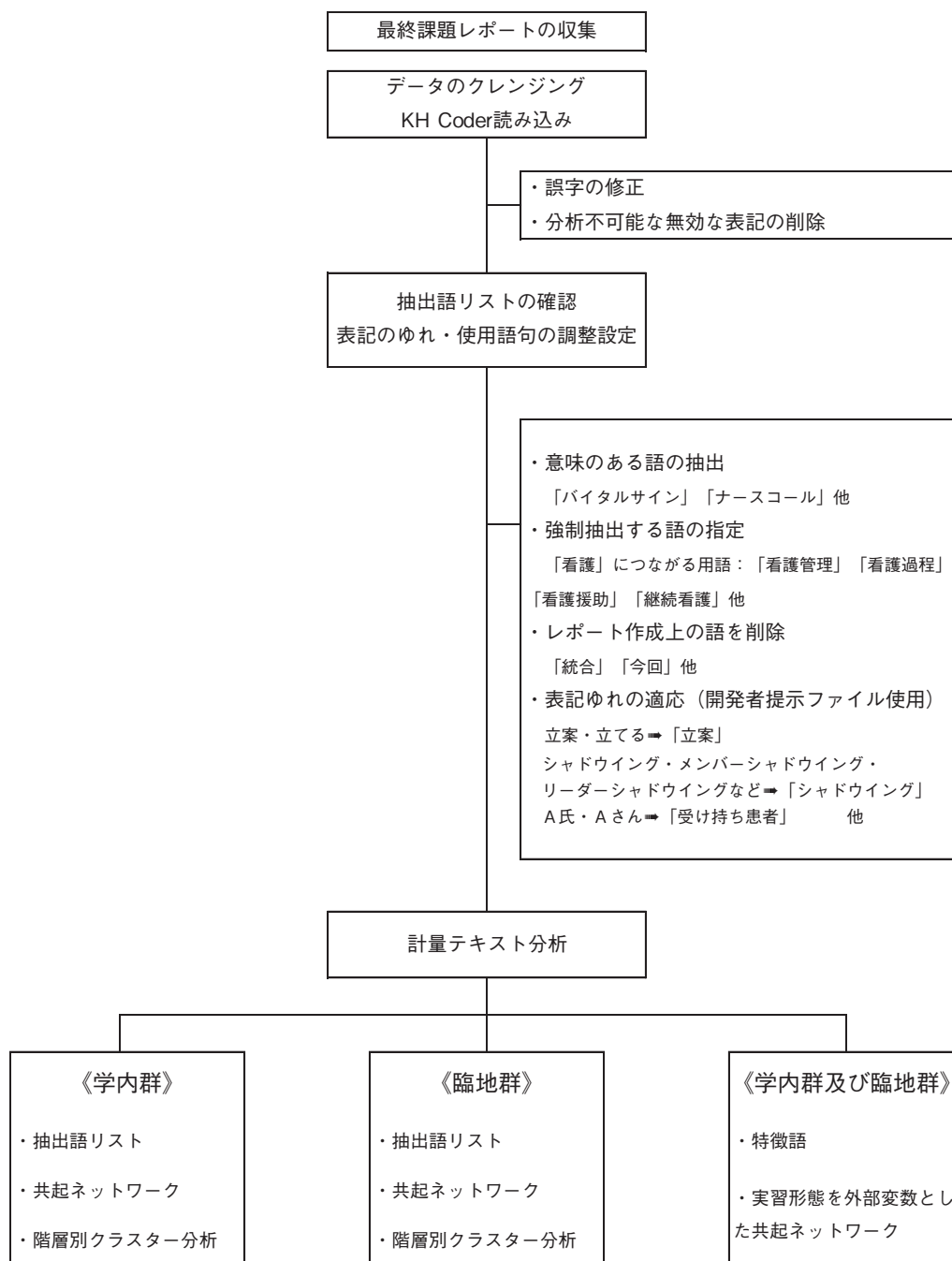


図1 データ分析の流れ

されているのかについて、クイックコンコーダンス機能を活用し、分析データに戻り確認した。

分析は、質的研究の経験のある1名の教員とKH Coderによる計量テキスト分析の経験のある2名の教員でおこない、質的研究のスーパーバイザーからの示唆を受けた。

6) 倫理的配慮

対象者には、研究内容、研究参加の可否は学校生活への影響はまったくないこと、統合実習の評価返却後から情報の取り扱いを行うこと、同意撤回は統合実習評価返却後に実施する完全匿名化処理前まで同意撤回可能であるがそれ以後は撤回できないこと、得られたデータは本研究以外で使用しないことを口頭及び文書で説明し、同意書の提出をもって研究参加の意思を確認した。また、本研究の結果は学会での発表や学術誌への投稿を予定しているが、公表にあたっては個人が特定されないような表記を行うことを説明した。本研究は

仙台青葉学院短期大学倫理委員会の承認を得た（承認番号0216）。本研究に関連し、開示すべき利益相反（COI）関係にある企業などはない。

V. 結果

本研究の同意を得られた学生は、学内群18名、臨地群21名の計39名（同意率44.3%）であった。「統合実習最終レポート」は学内群18名・臨地群21名のデータを分析対象とした。

1) 抽出語リスト

学生の最終レポートについて抽出語リストを作成し学内群、臨地群それぞれ上位50語を示した。（表2）学内群では「患者」248回、「学ぶ」108回、「行う」101回出現していた。臨地群では「患者」327回、「学ぶ」142回、「行う」136回出現していた。両群ともに上位3語が同じ語「患者」、「学ぶ」、「行う」であった。

表2 抽出語リスト（上位50語）

学内群				臨地群			
抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
患者	248	援助	30	患者	327	共有	46
学ぶ	108	受け持ち	29	学ぶ	142	病棟	46
行う	101	持つ	28	行う	136	感じる	44
安全	84	判断	28	看護師	134	職種	42
看護師	83	複数	28	実習	121	計画	41
考える	79	受け持つ	27	チーム	92	対応	41
実習	79	多重課題	27	必要	89	順位	39
必要	79	確認	26	安全	86	把握	39
医療	66	実際	26	考える	80	多重課題	38
感じる	54	業務	25	業務	79	確認	36
大切	50	状態	24	情報	76	学び	35
時間	49	知識	24	医療	68	提供	35
自分	48	連携	24	管理	62	スタッフ	34
行動	45	順位	23	優先	60	思う	32
優先	42	組織	23	メンバー	59	全体	31
チーム	39	感染	22	連携	53	理解	31
対策	36	観察	22	受け持ち	52	援助	30
能力	36	災害	22	大切	51	報告	30
思う	35	職種	22	行動	50	実際	29
計画	34	提供	22	時間	50	実施	29
検査	34	多い	21	役割	49	生活	29
ケア	33	対応	21	ケア	47	判断	28
重要	32	メンバー	20	シャドウイング	47	状況	26
インシデント	31	実施	20	自分	47	状態	26
学び	31	病棟	20	重要	47	持つ	25

2) 特徴語

学内群、臨地群の特徴語とそれぞれのJaccard係数を表3に示した。特徴語とは、データ全体に対して特に高い確率で出現している語でありそれぞれの群を特徴づけるような言葉である [10]。Jaccard係数が1に近いほど全体へのつながりが強いことを意味する。学内群の特徴語はJaccard係数の高い順に「学ぶ」、「実習」、「行う」、「考える」、「必要」、「安全」、「感じる」、「自分」、「医療」、「受け持ち」であった。臨地群の特徴語は「患者」、「看護師」、「業務」、「情報」、「管理」、「チーム」、「大切」、「シャドウイング」、「役割」、「共有」であった。

表3 特徴語

学内群		臨地群	
語句	Jaccard係数	語句	Jaccard係数
学ぶ	.400	患者	.500
実習	.345	看護師	.408
行う	.343	業務	.341
考える	.336	情報	.320
必要	.309	管理	.317
安全	.308	チーム	.290
感じる	.298	大切	.290
自分	.283	シャドウイング	.288
医療	.268	役割	.275
受け持ち	.258	共有	.265

3) 共起ネットワーク

共起ネットワークは文章中に出現する語と語が共に出現する（共起する）関係性を捉えることができるものである [11]。共起ネットワークの円の大きさは語の出現回数に比例している。

(1) 学内群の共起ネットワーク

学内群は6つのサブグラフに分けられ（図2）、サブグラフごとに元データを確認しながらサブグラフ名をつけた。それぞれのサブグラフについて【 】はサブグラフ名を、「 」は構成要素である語を表している。

サブグラフ1は、「時間」、「業務」、「検査」、「優先」、「多重課題」、「観察」、「計画」、「立てる」、「依

頼」、「状態」、「行動」、「順位」、「受け持ち」、「複数」、「受け持つ」から構成されており、複数患者を同時に受け持ち模擬患者の検査前後の状態観察など多重課題の発生により優先順位を考え他者へ協力を依頼するなど看護業務の時間調整を行っている、という意味が含まれていたため【複数患者受け持ちによるタイムマネジメント】と命名した。サブグラフ2は、「関わる」、「ケア」、「行う」、「大切」、「患者」、「学ぶ」、「実習」、「重要」、「援助」から構成されており、分析データに戻り確認すると今回の統合実習で患者の立場に立ち援助を行う中で安全を守るという重要な実践に関する内容が含まれていたため【患者を中心とした看護実践の重要性】とした。サブグラフ3は、「メンバー」、「チーム」、「医療」、「安全」、「確認」、「インシデント」、「対策」、「組織」から構成されており、組織の中でのインシデント対策やチームメンバー間での連携や確認が医療安全につながっているという内容を含んでいたため【組織全体で守る医療安全】とした。サブグラフ4は、「必要」、「看護師」、「考える」、「感じる」、「自分」、「発生」、「能力」、「知識」から構成されており、多重課題や患者の苦痛など問題が発生する看護場面から自分自身に必要な能力や知識を考えたという内容を含んでいたため【実習場面を通して考えた看護師として必要な知識・能力】とした。サブグラフ5は、「情報」、「連携」、「報告」、「共有」、「職種」の5つの語から構成されており、報告や情報共有、情報交換、相談といった多職種が連携するという意味が含まれていたため【報告・連絡・相談と多職種連携】とした。サブグラフ6は、「対応」、「病棟」、「管理」の3つの語から構成されており、病棟で緊急時の対応や臨機応変な対応、困難な場面への対応など、安全管理やスケジュール管理の実際についての記述があり【病棟でおこなわれている看護管理】とした。

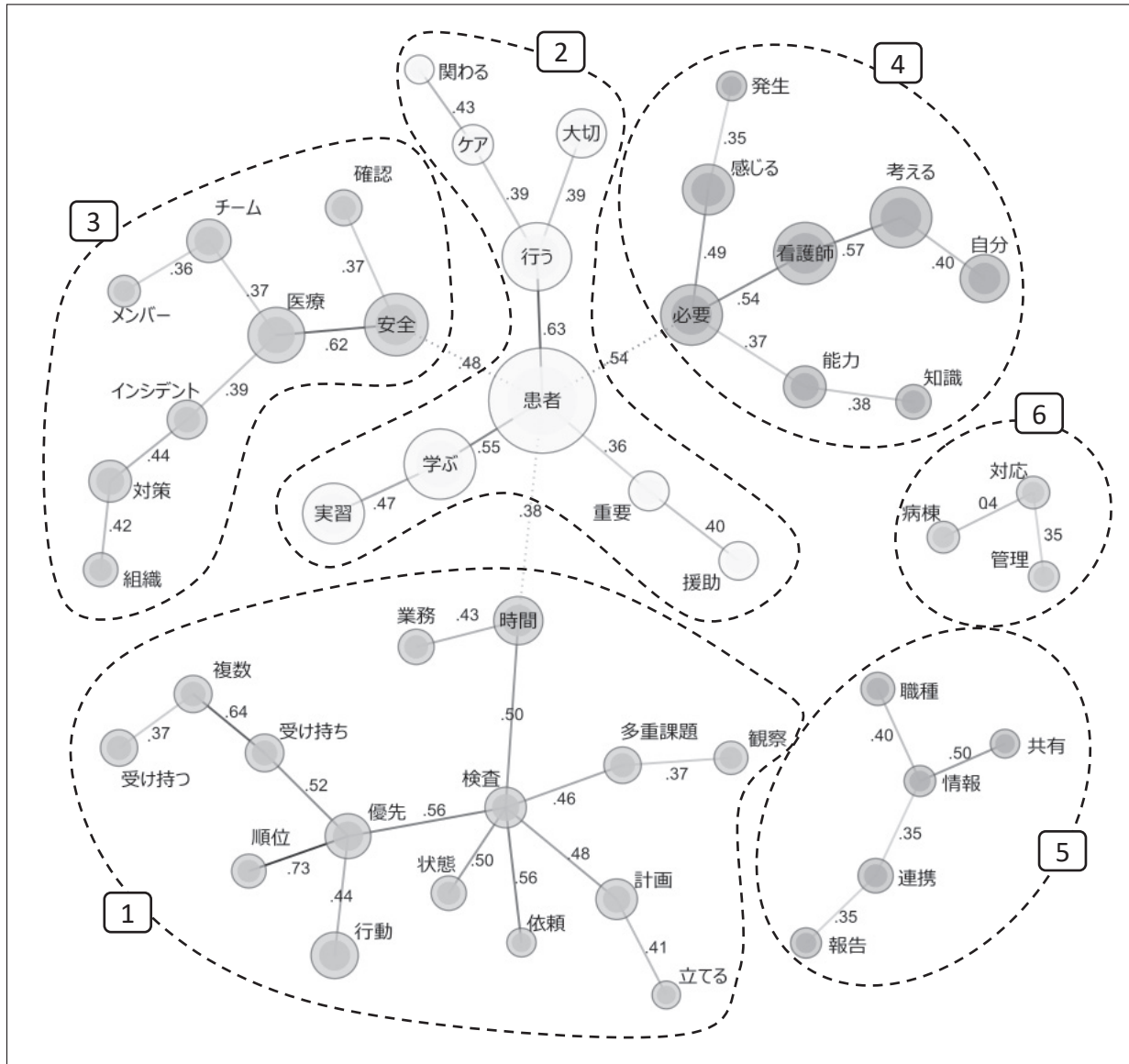


図2 学内群の共起ネットワーク

(2) 臨地群の共起ネットワーク

図3に示した通り10個のサブグラフに分けられた。

サブグラフ1は、「患者」、「看護師」、「必要」、「行う」、「大切」、「学ぶ」、「実習」、「学び」、「得る」、「考える」、「自分」、「感じる」の12語から構成され、患者との関わりや看護師の姿から自分にとっての看護師像や看護師として必要な行動を学び・感じ・考えた、という意味が含まれていたため【患者・看護師から学び考えた看護】とした。サブグラフ2は、「チーム」、「共有」、「情報」、「職種」、「連携」、「把握」、「行動」、「計画」、「立案」の9語から成り、チームの中で多職種が情報を共有しチー

ム全体の状況を把握し看護援助の行動計画を立案する、という意味が含まれていたため【医療従事者のつながりからの看護展開】とした。サブグラフ3は、「優先」、「多重課題」、「順位」、「時間」、「シャドウイング」、「業務」、「受け持ち」、「ケア」の8語から成り、シャドウイングを通し看護業務に触れ多重課題などの時間調整から優先順位を考えていたという内容が含まれていたため【看護業務の中での優先度】とした。サブグラフ4は、「スケジュール」、「協力」、「他」の3語から成り、病棟の業務や患者のスケジュールを確認し他のスタッフと協力するという意味が含まれていたため【他者との時間調整】とした。サブグラフ5は、「意識」、

時からの退院支援】とした。サブグラフ10は、「感染」、「対策」の2語から成り、院内の感染対策そのものや患者に対し感染を起こさないという意味が含まれていたため【看護実践上の感染対策】とした。

（3）実習形態を外部変数とした共起ネットワーク

学内と臨地それぞれの実習形態を外部変数として共起ネットワークを描画（図4）した。学内群・臨地群ともに共起していた語は「患者」、「学ぶ」、「行う」、「看護師」、「実習」、「必要」、「安全」、「医療」、「考える」、「時間」、「受け持ち」、「大切」、「学

び」の13語であった。学内群にのみ共起していた語は、「対策」、「行動」、「感じる」、「多重課題」、「複数」、「能力」、「自分」の7語であった。一方で、臨地群にのみ共起していた語は「連携」、「シャドウイング」、「把握」、「チーム」、「優先」、「情報」、「共有」、「業務」、「病棟」、「管理」、「役割」、「重要」の13語であった。なお、Jaccard係数を図中に示している。

4）階層的クラスター分析

階層的クラスター分析は、数量的裏付けに基づき類似性の高い語どうしをグループ化したものである [11]。

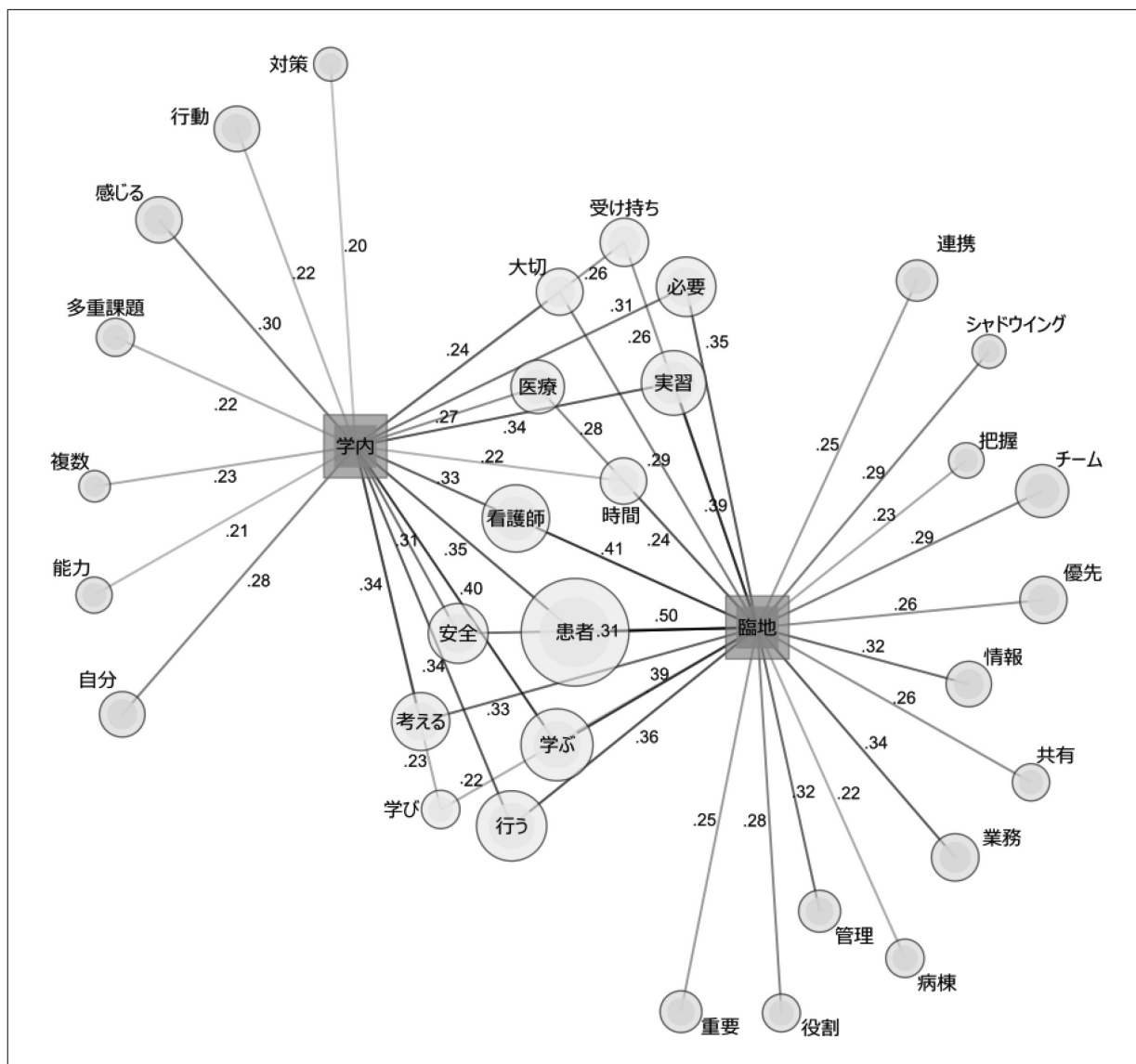


図4 実習形態を外部変数とした共起ネットワーク

(1) 学内群のクラスター分析

学内群は26語が抽出され7つのクラスターに分けられた。(図5)それぞれの語を分析データに戻り意味内容を確認しながら各クラスターに名称をつけた。《 》でクラスター名を、「 」で構成要素である語を示す。クラスター1は「行動」,「計画」,「優先」,「検査」の4つの語から構成され《計画の優先順位》と命名した。クラスター2は「大切」,「ケア」,「時間」の3語から構成され《ケアのためのタイムマネジメント》とした。クラスター3は「インシデント」,「対策」の2語か

ら構成され《組織としての取り組み》とした。クラスター4は「チーム」,「医療」,「安全」の3語から構成され《チームで取り組む医療安全》とした。クラスター5は「援助」,「重要」の2語から構成され《看護実践の判断の視点》とした。クラスター6は「必要」,「看護師」,「考える」,「感じる」,「学ぶ」,「患者」,「行う」の7語から構成され《患者中心の看護実践》とした。クラスター7は「学び」,「実習」,「思う」,「自分」,「能力」の5語から構成され《目指す看護師像と今の自分》とした。

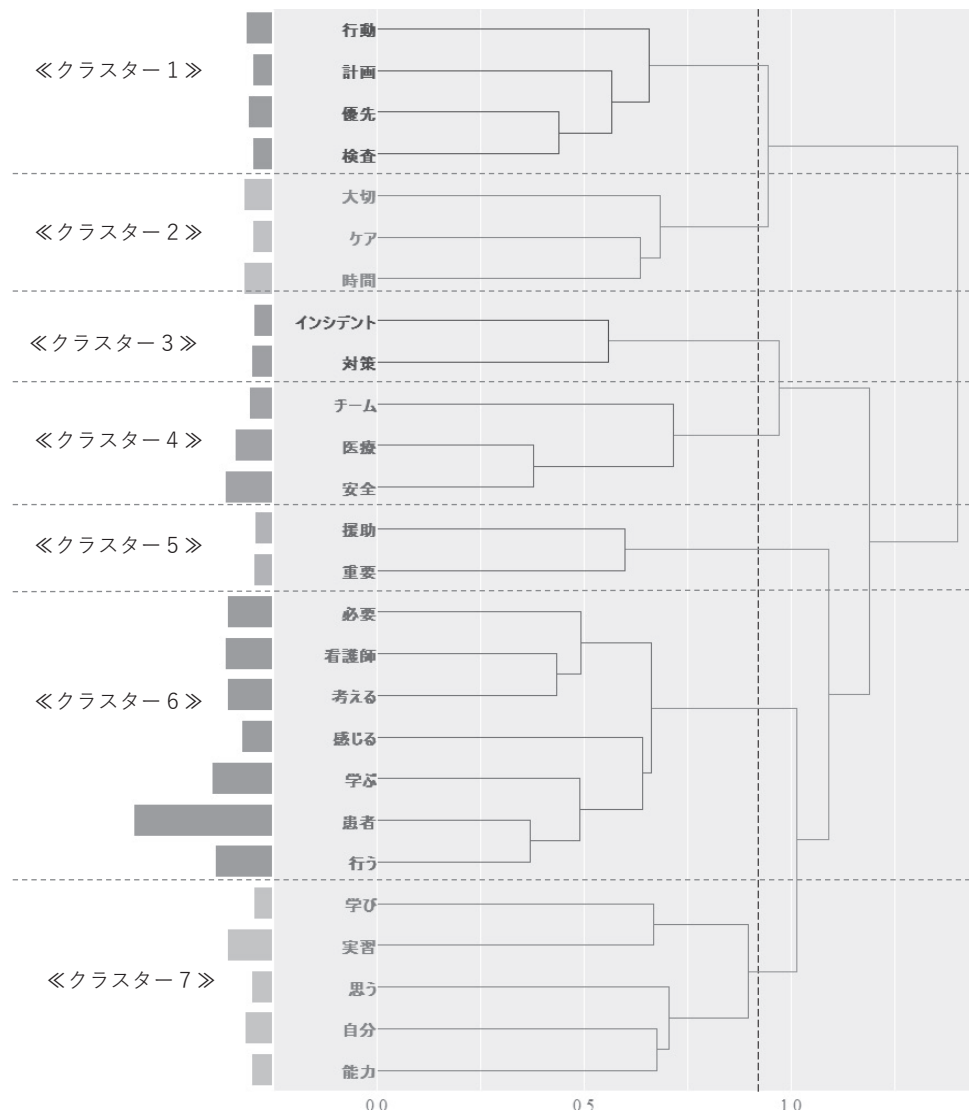


図5 学内群のクラスター分析

（2）臨地群の階層的クラスター分析

臨地群は43語が抽出され7つのクラスターに分けられた。（図6）それぞれの語を分析データに戻り意味内容を確認しながら各クラスターに名称をつけた。《 》でクラスター名を、「 」で構成要素である語を示す。

クラスター1は「対応」、「チーム」、「役割」、「業務」、「メンバー」、「確認」、「病棟」、「全体」の8語から成り《病棟における看護実践内容》とし

た。クラスター2は「医療」、「安全」、「報告」、「管理」、「重要」の5語から成り《医療安全を守る看護管理》とした。クラスター3は「情報」、「共有」、「職種」、「連携」、「スタッフ」、「提供」、「理解」、「大切」、「感じる」の9語から構成され《連携した看護援助》とした。クラスター4は「援助」、「学び」、「思う」の3語から構成され《看護実践の場からの学びと決意》とした。クラスター5は「多重課題」、「順位」、「優先」の3語から成り《多重課題

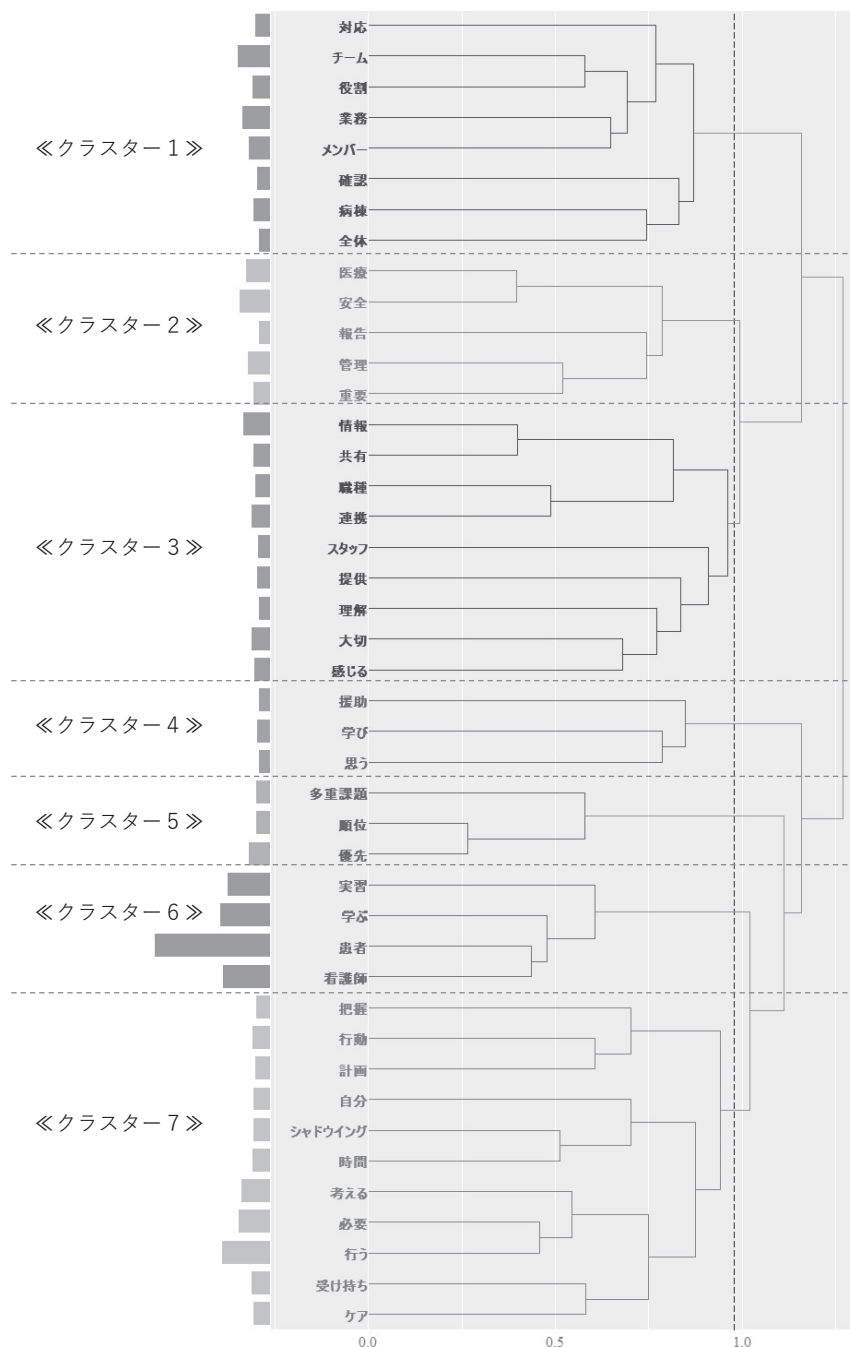


図6 臨地群のクラスター分析

と優先順位」とした。クラスター6は「実習」,「学ぶ」,「患者」,「看護師」の4語から成り「患者や看護師を通しての学び」とした。クラスター7は「把握」,「行動」,「計画」,「自分」,「シャドウイング」,「時間」,「考える」,「必要」,「行う」,「受け持ち」,「ケア」の11語から構成され「看護実践のための行動」とした。

VI. 考察

臨地群, 学内群それぞれの学び, そして各群の違いについて考察する。

1) 学内群の学び

学内群の最終レポートにおいて「患者」が最も多く抽出されていた。「患者」と多く共起していた語として「学ぶ」,「行う」,「大切」,「援助」などがあり,【患者を中心とした看護実践の重要性】が示された。学生は,看護援助を「行う」中で,「重要」である「ケア」や「関わり」を学んでいた。さらに,抽出語として「安全」が4番目に多く出現しており,「チーム」などの「組織」で対策をたて患者の安全を守るという【組織全体で守る医療安全】が示されていた。これは,実習目標のひとつである『医療安全』に関わる学びである。実習プログラムの中でオンライン会議システムを活用し看護部よりインシデント対策など病院の安全管理について説明を受けており,そのことが印象的な学びとなってあらわれていると考えられた。実習目標に沿った学びは他にも示されており,『時間管理』の学びとして【複数受け持ちによるタイムマネジメント】,『看護管理』は「対応」の語を含みつつ共起しており,病棟全体でインシデントに「対応」する,役割に応じた「対応」,緊急「対応」,多重課題への「対応」など【病棟でおこなわれている看護管理】の学びを得ていた。『多職種連携』はさまざまな職種との報告・連絡・相談の内容が含まれ【報告・連絡・相談と多職種連携】の学びとなっていた。さらに,【実習場面を通して考えた看護師として必要な知識や能力】として,患者の全身状態を観察する力が「必要」,地域に

ある社会資源も知識として備えておく「必要」がある,優先して関わる「必要」がある,歩行介助が「必要」などの学びが含まれていた。クラスター分析の結果をみると,共起ネットワーク図と同様の内容である「患者中心の看護実践」が示され出現回数が多い語が複数含まれており課題レポートに学生が多く用いた語であることが確認できた。コロナ禍により臨地に行けずとも,担当教員が模擬患者や指導者の役割を担い演じることで学生は「患者」や「看護師」を通じた学びを得ていたと考える。また,実習目標と同様の内容としては,『優先順位の判断』の学びである「計画の優先順位」,『時間管理』に該当する「ケアのためのタイムマネジメント」,『医療安全』の学びである「チームとして取り組む医療安全」,『看護管理』に該当しインシデント対策などの内容を含む「組織としての取り組み」について学びを得ていた。これは,学内代替実習のため意図的な状況や場面を設定したことが学生が実習目標を達成するために効果的であったということを示している。『医療チームの中での連携・協同』や『看護援助を安全に正確に実施できる』の内容を含む「看護実践の判断の視点」として,薬剤の確認が「重要」,知識も「重要」,患者のセルフケア能力を高めることが「重要」,リハビリ状況を確認しながら「援助」する,根拠のある「援助」を行う,などの学びが示され,場面設定やシミュレーション学習により看護実践の上で重要な視点について学びを得ていた。さらに,「目指す看護師像と今の自分」として,看護師になるためにはコミュニケーション「能力」やスケジュール管理「能力」が必要であり,「自分」の力量や「自分」の役割を見つめ「実習」での「学び」を活かしていきたいという前向きな内容が記述されていた。

2) 臨地群の学び

臨地群の最終レポートにおいても「患者」の語が最も多く抽出されていた。「患者」と多く共起された語として,「看護師」,「学ぶ」,「行う」,「必要」があり【患者・看護師から学び考えた看護】

が示されている。患者との関わりや看護師の姿から、コミュニケーション力や観察力が看護師に必要であることの他、優先順位を考慮しチーム内でのスケジュール把握の必要があること、周囲のスタッフへの協力依頼をする必要があるなどの、患者と関わる上で看護師として必要な行動を学んでいた。さらに共に共起していた語には「学ぶ」、「考える」、「感じる」が存在し、患者や看護師を通し学生は思考や感情を働かせ能動的に学ぶことができていたと言える。また、統合実習の実習目標として掲げていた『継続看護』は【入院時からの退院支援】、【チーム医療】、【多職種連携】は【医療従事者間のつながりからの看護展開】、【優先順位の判断】『時間管理』の学びは、【看護業務の中での優先度】【他者との時間調整】、【看護チームの一員としての責任ある行動】は【チームナーシングとしての協働】【意識を持った報告・連絡・相談】【個々の看護の力】、【医療安全】や【看護管理の実際】は、【安全を守る看護】【看護実践上の感染対策】という学びを得ていた。クラスター分析の結果において、《患者や看護師を通しての学び》が示されており、共起ネットワーク図と同様の結果が示され出現回数の多い語であった。先行研究では、統合実習の課題である『複数受け持ち』や『看護管理』などに意識が集中し個々の患者の理解が浅くなったとされている [7, 12] が、今回の分析結果では、患者を通して学びを得ることができており、「患者」の安全を第一に考える、「患者」の疾患や日常生活などをアセスメントする力が必要、「患者」と過ごす時間を工夫して作っている、などの内容で使用され、出現回数が最も高い結果となっていた。次に、7つのクラスターのうち《医療安全を守る看護管理》、《連携した看護援助》、《多重課題と優先順位》は、実習目標である【医療安全】や【看護管理の実際】、【看護チームの一員としての責任ある行動】、【優先順位の判断】、【時間管理】に即した学びとなっていた。一方で、他3つのクラスターは、共起ネットワーク図と異なる結果が確認された。《病棟における看護実践内容》や《看護実践のための行動》の2

つは、シャドウイングや受け持ち患者へのケアを経験することで、「受け持ち」患者の「ケア」の「必要性」を「考える」、患者の状態を「把握」し「行動」「計画」を立てる、「病棟」「全体」を「確認」し「チーム」で「メンバー」と共同しながら「役割」を果たす、などの、より実践的な学びを得ることができていた。また、《看護実践の場からの学びと決意》として、患者への看護援助を通し学ぶことにより、安全安楽な看護を提供できるように努めたいと「思う」、物事の根拠を考えて行動することを意識したいと「思う」、自分の業務だけでなく他メンバーも支えられるようになりたいと「思う」、すべての援助に根拠と責任を持ち患者・家族と誠実に向き合っていきたいと「思う」、忙しくても笑顔を忘れないよう心掛けたいと「思う」、などの学生の決意が示されていた。佐居[13]は、シャドウイングをおこなうことが学生の“自らの成長の自覚”や“モチベーションの向上”につながったとしている。看護師の姿から学生は理想とする看護師像を描き、課題レポートの中で目標とする姿に向かう決意を語っていた。統合実習は学生時代最後の実習であるが、臨床で働くことへの決意を自覚し前向きな思いを持つことができた、という効果が確認できた。

3) 学内群と臨地群の学びの違い

実習形態を外部変数とした共起ネットワークでは、「患者」「学ぶ」「行う」がともに共起しており、特に「患者」はJaccard係数が高く出現回数が多い強い共起関係にある。次に「看護師」も強く共起しており、学内、臨地ともに、患者や看護師を通して学び看護援助を実践していることが示された。

学内群と共起している語の中で、「感じる」、「行動」、「自分」は感性を活用し行動していることが読み取れるが、自分自身を見つめている特徴があると言える。一方で、臨地と共起している語は語の数が多く、シャドウイングなどを体験しながら幅広く学びを得ることができたと言える。特に強く共起しているのは「業務」、「情報」、「チーム」、

「シャドウイング」である。臨地に行くことができたのは4日間とコロナ禍のため通常に比べると日数が少なかったが、学生は看護師が実践する看護を見学もしくは一緒に実践しながら学びを得ていた。これは、各群の特徴をあらわす特徴語の結果にも示されている。学内群の上位が「学ぶ」、「実習」、「行う」、「考える」など自分を主体とした語であるのに対し、臨地群は「患者」、「看護師」、「業務」、「情報」など他者を通じた語となっている。学内群は自分自身を見つめ自分を主体とした学びを得、臨地群は患者や看護師など他者との関わりの場面から他者の存在を大きく感じながらより実践的に学んでいた。

看護技術経験状況の違い〔3〕とともに、短期間でも臨地での関わりが学生の学びに影響を及ぼす事を前提に、今後も実習施設との連携を強化し代替実習の教育的アプローチ方法を吟味する必要性が示唆された。

VII. 結論

- 1) 学内群も臨地群も同様に、統合実習のキーワードである継続看護・看護過程（複数受け持ち）・チーム医療・安全管理・看護倫理・看護観に関する学びが多く得られていた。
- 2) 最も多く出現した語は学内群・臨地群ともに「患者」、「学ぶ」、「行う」であり、学内群では【患者を中心とした看護実践の重要性】が、臨地群から【患者・看護師から学び考えた看護】が示された。
- 3) 学内群では、自分の力量や自分の役割を見つめ、目指す看護師像を描いており、自分自身の看護観を深める学びを得ていた。
- 4) 臨地群では、患者との関わりや看護師の姿から学生は理想とする看護師像を描き、目標とする姿に向かう決意を語っていた。
- 5) 学内群は自分自身を見つめ自分を主体とした学びを得、臨地群は患者や看護師など他者との関わりの場面から他者の存在を大きく感じながらより実践的に学んでいた。
- 6) 短期間でも臨地での関わりが学生の学びに

影響を及ぼす事を前提に、今後も実習施設との連携を強化し代替実習の教育的アプローチ方法を吟味する必要性が示唆された。

VIII. 研究の限界と今後の課題

本研究の対象となる実習は実習形態の違いが一部のみであり、得られた知見は一般化までには至らないことが本研究の限界である。今後も感染症拡大に伴う社会状況、実習施設の受け入れ状況により、代替実習の必要性は高まり、実習形態はさらに多岐にわたることも想定される。引き続き、代替実習で学生がどのような時、何を、どのように学んでいるかなどの知見の蓄積が望まれる。

IX. 謝辞

本研究にあたり、調査参加へご快諾していただいた学生の方々に深謝いたします。コロナ禍、統合実習が複数の実習形態の代替実習となり、その内容の精選及び指導案の作成の経緯は試行錯誤の繰り返しでもあった。そのような中、臨地実習受け入れ及びリモートでのオリエンテーションをご快諾いただいた病院施設をはじめ、臨床指導者の皆様、実習指導をいただきました教員の方々に感謝いたします。

文献

1. 厚生労働省ホームページ 看護基礎教育の充実の関する検討会報告書 平成19年4月16日。
<https://www.mhlw.go.jp/shingi/2007/04/dl/s0420-13.pdf>
(2022年1月25日引用)
2. 文部科学省ホームページ 大学における看護実践能力の育成の充実に向けて 平成14年3月26日 看護学教育のあり方に関する検討会報告。
https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/018/gaiyou/020401.htm
(2022年1月25日引用)
3. 遠藤美穂子、伊藤茉莉子、黒木雅美、他：

- コロナ禍の統合実習における実習形態の違いによる看護技術経験状況の現状と今後の課題. 仙台青葉学院短期大学紀要. 2021 ; 13 (1) : 25-36.
3. 岡田麻里、今井多樹子、井上誠、他：既修の知識と技術を統合する多重課題演習とシャドウイング実習から得られた3年次看護学生の学び. 日本看護科学会誌. 2017 ; 37 : 446-455.
 4. 近藤恵子、小林たつ子：複数患者受け持ちに関する学生の学びと困難をふまえた統合実習指導の課題. 長野県看護大学紀要. 2017 ; 19 : 33-44.
 5. 岩坂信子、尾形裕子：継続統合看護学実習におけるジョブシャドウイング導入による看護マネジメントに関する学生の学び. 北海道文教大学研究紀要. 2017 ; 41 : 97-107.
 6. 佐居由美、松谷美和子、平林優子、他：看護基礎教育と看護実践とのギャップを縮める総合実習の効果～看護学生から臨床看護師へ～. 聖路加看護学会誌. 2009 ; 13 (1) : 24-33.
 7. 文部科学省初等中等教育局, 他：新型コロナウイルス感染症の発生に伴う医療関係職種等の各学校、養成所および養成施設などの対応について. 令和2年2月28日付け事務連絡.
 8. 阿部幸恵：ナーシング・スキル日本版動画講義シリーズ シミュレーションの指導の基礎を学ぼう『第1回シミュレーションとは』. 講義資料. (2021年2月5日引用)
 9. 樋口耕一：社会調査のための計量テキスト分析－内容分析の継承と発展を目指して（第2版）. ナカニシヤ出版, 2020.
 10. 末吉美喜：テキストマイニング入門：ExcelとKH Coderでわかるデータ分析（第1版）. オーム社, 2019.
 11. 飯倉充美、田中樹、大釜信政、他：成人看護学領域における統合実習の意義と今後の課題. 帝京科学大学教育. 2020 ; 5 (2) : 21-27.
 12. 佐居由美、大久保暢子、石本亜希子、他：看護学導入プログラムにおけるシャドウイングアドバンスの試み. 聖路加看護大学紀要. 2008 ; 34 : 70-78.

